

## 令和4年度「不登校に関する研修会」(第2回) 講義記録

- 1 日 時 令和4年8月10日(水) 10時から16時
- 2 場 所 西宮市民会館
- 3 講 師 兵庫教育大学 秋光 恵子 教授
- 4 テーマ すべての子どもに居場所のある学級づくり—不登校未然防止のために—

### 5 内 容

#### (1) 不登校の現状

- ・休校やコロナ関係の欠席等で、勉強が分かりにくい、ソーシャルディスタンス、学校に行っても友だちとわいわいおしゃべりできない、給食は前を向いて黙食等、学校が楽しいと感じられないため、不登校が増えている。
- ・小学校から学年があがるにつれて不登校が増える。
- ・高校は義務教育ではないので、途中で進路変更(中退)するため不登校は少ないが、何とか中退させないように取組を進めている。
- ・不登校の原因は、本人の不安、無気力が多いが、背景には友だち関係や家庭、学校の問題等いろいろな要素が絡まり合っている。  
→学校でできる手立てが何かある。すべての子どもに対して学校で何ができるかを考える。

#### (2) 学校心理学が考える支援の枠組み

- ・学校心理学とは学校に一番身近な心理学
- ・三次的支援(問題深刻化の阻止)・・・明らかに支援を要する子ども  
(不登校、いじめ被害・加害、反社会的な問題、家庭での養育の問題等)  
→SCが直接支援を行う。
- ・二次的支援(早期発見・早期対応)・・・一部の気になる子ども(元気のなさ、学習意欲の低下等)  
→見守る支援「ちょっと様子をみようか」
- ・一次的支援(未然防止)・・・学校・学級のすべての子ども →「ノーマークをつくらない」
- ・不登校になる子どもの中には、先生が「ノーマークだった」という子がいる。  
気になってからの支援は遅い場合がある。すべての子どもに最初から目配り気配りの支援や指導ができるのは先生だけである。
- ・「学校に来ている子」「それ以外の子」と分けるのではなく、両方をひっくるめて「みんな仲間」と考えて支援する。
- ・三次的支援・・・問題の深刻化の阻止
- ・二次的支援・・・早期発見・早期対応

- ・一次的支援・・・未然防止「ノーマーク」をつくらない。
- ・不登校の中には授業には参加していないけれどSCだけに会いに来る子がいる。  
⇒学校に思いがあるからSCに話しに来ている。
- ・不登校でも「誰の隣の席か」「教室の雰囲気はどうか」など、教室の情報には大きな関心がある。
- ・学校心理学＝教員が教室でできること。みんなに対して働きかけることが大切。
- ・心理学は調査をしてデータを積み重ねる。自分の経験だけでやってきたこと、直感的にやってきたことのエビデンスとなる。

(3) 「居場所」をつくる教師の対応

- ・学校は「居場所」ではあるけれど、自由はない【校則？】  
⇒受け入れてもらっている【友人関係？】
- ・「友だちと何ももめていない。でもしんどい」という子が増えている。  
一人ぼっちは嫌→「どこかのグループに入っておかないと」  
→気が合わなくても一緒にいる→友だちに対して我慢して過ごす→気が合う等の感覚が抜ける  
⇒【先生】の存在が、学校における「居場所」感を生み出している可能性がある

(4) 生徒が教師に期待するのは「何とかしてほしい」よりも「話を聞いてほしい」

- ・先生は生徒が「何とかしてほしい」と思っていると考えているが、子どもは先生に「話を聞いてほしい」と思っている。先生の予測と子どもの回答が少しずれている。
- ・先生が「よく相談に来ていたよね」と話すと、「先生に相談したことなんてない」と返ってきた。→子どもは先生に「ちょっと話しに行こう」ぐらいの軽い気持ち

(5) 教師への相談を促す要因

- ・相談しやすさ、相談しにくさの要因は感じていても、相談しにくさの要因によって「相談しに行くのはやめておこう」とはならない。
- ・子どもには「真剣に話を聞いてくれる先生」と印象が残る。
- ・先生はアドバイスをしたくなるけれど、まずは「話を聞く」ことが大切。

(6) 子どもにどう働きかけるか＝先生の「思い」「願い」をどう伝えるか

- ・「個人への働きかけ」と「学級への働きかけ」がある。
- 褒める・認める**
  - ・ちょっとしたことでも褒めてくれる
  - ・小さなことでも感謝の言葉をかけてくれる
  - ・ちょっとした時にも励ましてくれる
- 何気ない働きかけ**
  - ・気軽に話を聞いてくれる
  - ・そばまで来て話しかけてくれる
  - ・気分や調子の悪いときに気にかけてくれる
- 意図が伝わる指導・注意**
  - ・注意する前に事情を尋ねてくれる

- ・悪いことは悪いとはっきり言ってくれる
- ・注意するとき理由を説明してくれる

**意図が伝わらない指導・注意**

- ・一方的に注意される
  - ・他の生徒と比べて注意される
  - ・「〇年生にもなって」などと言う
- ・子どもは、先生が個人個人に声かけをしている姿を見て、「何かあったら自分にも声をかけてくれる」と安心感を持つ。
- 学級全体への働きかけが、一人一人の子どもの先生への信頼感を育む
- ・子どもは、「先生に相談したら真剣に話を聞いてくれる」と思う反面、「相談すると心が弱いと思われる」という不安も持っている。でも、「先生が聞いてくれる」という思いの方が強いので相談している。
- ・クラスの中で誰かを褒める・叱ることはクラス全体に影響する。
- 学級の中の「ひとり」への働きかけは「全員」に対する働きかけとなる。

(7) 「聴く」ことで子どもが抱える問題に気づき、理解する

- ・不登校のサインが見られる頃には背景に目を向け、子どもの気持ちを聴く。
  - ・子どもの気持ちを「聴く」「知る」ためには「話してもらう」ことが必要
- 支援につながる・つなげる

(8) 教師による応答技法

ア 相手との関係を結ぶ応答

- ・非指示的リード「最近ちょっと遅刻が多いし元気がないみたいと思うけど・・・どうかした」
- ・内容の繰り返し、または要約「〇〇さんの態度が気になるんやね」「提出物がたまってきたるか」
- ・感情の反映「それは辛いなあ」「ちょっとしんどいんやね」
- ・受容「あーそういうことか」「なるほどなあ」

イ 相手との共通理解をつくる応答

- ・情報の提供「〇〇さんの部活、今忙しいみたいやね」「前にも提出物がたまった生徒が△△先生に相談して頑張れたことがあったよ」
- ・評価、解決案を含まない指示「何ができそうか、考えてみてはどうかね」
- ・自己開示「先生も一緒に考えてみるから」「このままやったら先生も心配やし」

ウ 相手と落としどころを見つける応答

- ・対決「このままやったらどうなる?」「今学期の遅刻はもう〇回|になってるよね」
- ・現実原則の提示、確認「確かに提出物は最終的には出さないとまずいね」
- ・解釈「もうどうしたらいいか考えられないって感じかあ」
- ・提案「とりあえず〇〇さんと一度話してみては?」
- ・助言「△△先生に相談してみるのがいいよ」

※うまくいかない時は信頼関係や共通理解ができているか立ち返って考える。

エ 相手を身構えさせるかもしれない応答

- ・説教、説得「〇〇が当たり前です」
- ・注意「〇〇はやめましょう」
- ・命令「〇〇してください」
- ・是認「〇〇なら良いですね」
- ・診断「〇〇は難しいですよ」
- ・批判「〇〇は良くないです」
- ・否認「〇〇はダメです」

※口調や態度、関係性で受け取られ方は変わる。

(9) 子どもを取り巻く援助資源

- ・ どのような援助を誰が提供できるか書き出してまとめてみる。
  - ・ ・ 学習面、進路面、心理・社会面、健康面
- ・ 自分一人で抱え込まず、援助資源を活用する。
- ・ 職員室での会話、職員同士の関係性も大切にしていく。

(記録：県立但馬やまびこの郷)